

2026 年の処暑(しょしょ)は 8 月 23 日です。

次の節気である白露前日までの期間 8/23～9/6 を指す場合もあります。

厳しい暑さがようやく峠を越え、朝夕には涼しい風が吹き始めて虫の音が聞こえ出す。

秋の気配を感じる時期です。

この処暑の頃にちょうど見ごろを迎え、日本の秋の訪れを彩るのが秋の七草です。

「七草粥」の風習で知られる「春の七草」は、年末年始の暴飲暴食で疲れた胃腸を休めるために、また厳しい冬を元気に越えられるよう、お粥にして食べますが、秋の七草は食用にはせず目で見て楽しむもので、平安時代には、中秋の名月や秋の七草を鑑賞しながら歌を詠むことが貴族の優雅な楽しみでした。

<万葉集における秋の七草>

万葉集を代表する歌人、山上憶良が次の二首の歌を読んで以来、秋を代表する草花として

「秋の七草」の由来となり、親しまれるようになりました。

「秋の野に咲きたる花を指折り(およびをり)かき数(かぞ)ふれば七種(ななくさ)の花」(巻 8-1537)

「萩の花 尾花 葛花 などしこの花 をみなへし また藤袴 朝貌(あさがほ)の花」(巻 8-1538)

最初の歌で「秋の野原に咲いている美しい花を数えると 7 種類であった」とし、

この 7 種類を秋の七草とされています。

なお、「朝貌」については諸説ありますが、現在では桔梗(ききょう)説が定説です。

「および」について意味：

日本の古い言葉(古語)で「指(ゆび)」のこと。

指(および)折りは、「指(および)」を折って数を数えること。

春の七草のように食べられるわけでもなく、華やかな草も花も入っていませんが、日本の秋らしいしみじみとしたよさを感じさせるものばかりで、風流を感じます。



<処暑の時期の有名な一句>

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり 飯田蛇笏(いいだこつ)

鉄のように引き締まった冷たい秋の空気に乾いた風鈴の音が響く様子を重厚な調べで詠んでいます。夏ならばその音が喜ばれ、珍重されていた風鈴は、季節の移り変わりによってそれを吊り下げた本人からも忘れ去られるものとなってしまう。秋の風景の中で、風鈴の音にひとり対峙する作者。風鈴も一つならまた作者も一人であり、そこにもそこはかとなない哀感が漂っています。



飯田蛇笏は明治から昭和にかけて活躍した俳人の一人で、美しい自然を詠み込んだ句を多く作り、自然を客観的に写生し詠む伝統的な俳句の一派で、故郷である山梨県に留まったまま、「雲母」という俳句雑誌の主宰をしていました。